

第1回 鉄の伝搬と航路

- ・鉄の伝搬と時代背景
- ・鉄の運搬ルート
- ・倭国大乱の背景

中心出典:「古代の謎は「鉄」で解ける」(長野正孝著、PHP)

「古代の謎は「海路」で解ける」(長野正孝著、PHP)

「古代の技術を知れば、「日本書紀」の謎が解ける」(長野正孝著、PHP)

「古事記」(竹田恒泰著、学研)、「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社) 他

講師: 井上正和

1. 鉄の伝搬と時代背景

(1) 朝鮮半島と中国

① 朝鮮半島の動き

参照資料1-1

- ・紀元前3世紀、周代の「戦国の七雄」の一つである燕が朝鮮半島を治めている時代、朝鮮半島で鉄が作られ始めた。日本にも流れ始める。
- ・紀元前194年、中国人(燕・斉の亡命者)と原住民の連合政権「衛氏朝鮮」が建国される。王陰城を築き、現在の平壤を首都とし、鉄資源を保有した。

② 中国の動き

- ・当時の中国(秦・前漢)は朝鮮半島へ渤海湾を渡る手段もなく、無関心。秦の始皇帝を始め、万里の長城が海に落ちる山海関(さんかいかん)から東には関心がなかった。
- ・前漢の武帝(紀元前141-87年在位)の時代、西方の匈奴討伐の結果、中国と西方の通商路が開け、西欧やインドから多くの知識・文物がシルクロードを通じて伝わった。
⇒その中には帆船の技術もあった。渤海湾を渡れるようになる。

参照資料1-2-①

③ 紀元前109年、前漢の武帝は水軍を結成し、海と陸から衛氏朝鮮を攻め滅ぼす。

- ⇒中国に鉄資源(精錬・製造施設も含む)をもたらし、朝鮮を植民地支配し、鉄を得てからの漢(前漢)は侵略国家に変貌する。

参照資料1-2-②

(2) 鉄の伝搬

① 贈答としての鉄: 前漢では当初、この朝鮮の鉄は前漢が国家統制し、冊封体制の一貫として周辺の友好国には恭順させるための贈答品として贈られた。(BC1-AD1)

- ⇒威力のある長剣(素環頭鉄刀など)は倭や辰韓に、短剣は高句麗など周辺国に。

② 鉄のルート: 2つの路があった。倭人の道(北九州)、高句麗の道(日本海)。

2. 鉄の運搬ルート

楽浪郡では鉄の交易を管理・統制し、製鉄技術を秘匿していたが周辺民族に襲われ、そのたびに鉄の鍛造技術拡散することになる。

参照資料1ー3

(1) 高句麗の道

高句麗の遊牧民は略奪した鉄を朝鮮半島の東海岸を馬で運び、リマン海流を使った。

① 弥生時代後半から末期の墳墓出土剣や鉄器

- * 出土剣や鉄器は、丹後、播磨、但馬、越前、上野(こうずけ)の方が北九州より多い。
 - * 伯耆(ほうき)の国(鳥取県)では、遼東半島で作られた鉄器(紀元前400年前後)が運ばれた。
 - ・対馬経由では九州しかないはずの素環頭鉄刀が出土する。
 - ・妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡から400点以上の鉄器が出土。
- ⇒これらの地で鉄器生産が行われていた。

参照資料1ー4

② 隠岐の島には200基もの円墳・角墳が混じった墳墓がある。

- ・倭国大乱の時代に多くの漂着民がこの地に漂着した。
- ・縄文時代から朝鮮南部から隠岐の島・出雲の航路があった。
- ・弥生中期以降(一世紀頃)から始まる「鉄の道」の北限が丹後半島。
- ・隠岐の島の西ノ島の海(あま)神社の例祭には「船渡御祭」が残る。この場所から出航した名残。

サイトあり

③ 黒曜石から鉄の交易路へ

- * 弥生中期後半になると日本海から土笛陶埴注(とうけん)が消える。
- (注)鉄とともに古代中国から伝わった楽器。音はひどく、祭祀や船乗りの汽笛か。
- ⇒土笛陶埴を使わない民族が来たということになる。

- * 紀元1世紀以降、丹後を「黒曜石等の路」から「鉄の路」に変えた別の民族がいた。

(2)倭人の道

①紀元前3世紀—紀元後2世紀、北部九州、福岡県糸島市井原鍵溝(やりみぞ)遺跡、佐賀県唐津市の桜馬場(さくらのばば)遺跡など、鍛冶^注(たんち)技術が発達した。

(注)鍛冶(かじ)の技術:金属を鍛錬して製品を製造する技術である。

- ・近くに伊都国の王都、三雲南小路遺跡(鉄剣や多量の銅鏡が出土)とは同時代である。
- ・多くの甕棺墓から鉄器が出土する。輸入された質の良い鉄剣(素環頭鉄刀)は副葬品として埋葬されている。

②同時期、壱岐の原の辻遺跡、加羅神(カラカミ)遺跡から農耕具や武器、狩猟漁撈用鉄器、精錬炉跡などが出土する。

⇒対馬・壱岐を経由し、北九州で普及したことが明らかになる。

(3)倭人とは

島、小島ということ

①倭人の範囲

*九州、西日本の島嶼部(とうしょぶ)、朝鮮半島の西部海域から遼東半島までの海域を活動していた海洋民族。

*同じ人種ではなく、日本海を渡る知恵と技術を付けた仲間たちで、海で助け合うことが宿命づけられた「海洋民族」。ハンザ同盟のような都市連合であったと考えられる

②朝鮮半島との交易

*卑弥呼の時代前まで勾玉、翡翠(糸魚川)、黒曜石^注(丹後)などを持ち寄り、弁韓へ年数度渡海した。(注)鉄器が出るまでは矢じりには最も重要な石材。

*倭国が渡航した時期は、旧暦の4月～6月に集中、9月～1月は無し。倭寇の渡来時期として記述。(三国史記)

3. 倭国大乱の背景

(1) 魏志倭人伝の倭国大乱の記述

① 魏志倭人伝の記述

「後漢の桓帝(かんてい)、霊帝(れいてい)の時代(148年から189年)頃、倭国は長らく乱れ、何年も攻め合った。そこで、一人の女子をともに王に立てた。名は卑弥呼・・・」。

魏志倭人伝以外に記述はない。

- ② 中国(当時は後漢、魏の時代)は、東海岸で起き始めていた高句麗の南下情報は把握していなかった。三国志時代に入り、中国内の勢力争いでてがまわらず、無関心。

(2) 倭国大乱のきっかけ

- ① 西暦37年、高句麗は楽浪郡を突然侵略する。さらに朝鮮半島東海岸まで達する。(東夷伝)
高句麗の侵攻で朝鮮半島の北半分は高句麗領になり、圧政が始まる。

⇒ 東沃沮(ひがしようそ)や濊(わい)の住民は難民として、南下して、一部はボートピープルとして海に逃れた。

参照資料1-5

- ② 難民となった彼らは、リマン海流から対馬海流に乗り日本海に出、出雲や丹後半島界隈に漂着した。キトラ古墳は遊牧民の脳(思考)と行動様式を顕している。

- ・ キトラ古墳の天井の東西南北を示す青龍、白虎、朱雀、玄武の四神図と宿星図(しゅくせいず)。
 - ・ この四神図と宿星図はこの塚の主が黄泉の国で数百、数千の家畜を連れて旅する時、欠かせない位置情報を表している。
- ⇒ 草原の塚と夜の星座は自分の位置と進むべき道を教えた。

参照資料1-6

(3)天日槍命(あめのひぼこのみこと)の出現(播磨風土記)

参照資料1-7

参照資料1-8

①一世紀前半、「新羅の王子が突然播磨に来て、淡路島を占領した。地元の勢力と争って但馬の円山川流域を支配し、豊岡の出石(いづし)にも拠点を置いた。」という。

参照資料1-9

⇒朝鮮半島の1世紀前半の高句麗の侵入の動きと一致する。

⇒淡路島に1世紀ごろの製鉄遺跡「五斗長垣内(ごつさかいと)遺跡」が鍛造製鉄所として操業していた事実が確かめられている。

⇒円山川から市川、揖保川まで抜ける最初の機内への鉄の道が出来ていたことになる。

②播磨に来襲した王子は新羅の王子ではない。当時、新羅という国はない。瀼(わい)の部族のボートピープル(漂着難民)であろう。

(4)鉄の副葬品を有する異形墳墓の大量発生

①積石墓、円墳の増加

- ・世紀前の日本の墳墓は土壙墓、中国・朝鮮の影響を受けた甕棺、周溝墓、支石墓などがあつた。
- ・1世紀ごろ、全国的に今まで見られない積石塚(墓)が増え、後に円墳が増え始める。

参照資料1-10

②方形貼石墓(はりいしぼ)の出現

* 丹後では紀元前100年から紀元100年頃に大小数多くの光る方形貼石墓注ができる。

(注)古墳時代の吉備や大和では貼石を葺石といい、円筒埴輪も拝した墳墓になる。

参照資料1-10

- ・鳥取県より東の海岸、河川から瀬戸内海側にかけて分布する。
- ・古墳時代になっても増え続ける。⇒間断なく漂着難民が来た。

* 貼石墓は夫余や高句麗(現在の中国東北部と北朝鮮)系の遊牧民の墳墓と酷似する。

③製鉄技術の伝搬の起源

参照資料1-11

* 遊牧の民スキタイ王国の金属文明(前7-6世紀)が伝播が起源と言われる。